

鑑画会時代の狩野芳崖・橋本雅邦の山水画 —アーネスト・フェノロサの美術理論の視点から—

井上 瞳 (愛知学院大学)

1878(明治11)年に来日したフェノロサは、日本美術への関心を深め、古美術の収集を行う一方、講演「美術真説」において同時代の画家たちへ日本画の革新を促した。1884(明治17)年には自らが理想とする美術理論の実践の場として鑑画会を舞台に日本画の革新運動を推し進めていくが、その片腕としてフェノロサが見出したのが狩野芳崖と橋本雅邦であった。二人は狩野勝川院雅信に学んだ同門であり、従来、鑑画会時代の山水画は、古画との関連で考察されるほか、ターナーの影響も指摘されてきた。ただし西洋絵画を否定したフェノロサの関与はあくまで理論の範囲に留まると論じられてきた。しかし実際は東西の要素を取り入れ、彼らに示唆を与えていたことを指摘したい。

フェノロサが唱道する日本画の革新運動で目指したものは、端的に言うならば、西洋と東洋の融合であり、そこからさらに高次の芸術を生み出すことであった。フェノロサは講演「美術真説」で、自らの美の「十格」を中国南斉の謝赫『古画品録』の「画の六法」になぞらえて論じ、東西両様の画論を総合し本質を見出した「絶対的美術哲学」と述べている。では彼の西洋側の美術理論は、何を拠り所にしていただろうか。本発表では、フェノロサの理論と画法それぞれに西洋と東洋の引用源を探り、芳崖と雅邦の山水画にどのように表現されているかを明らかにする。

本発表で西洋の引用源として取り上げたいのが、ボストンの富豪ウィリアム・ビゲローの寄贈洋書(東京藝術大学附属図書館蔵)である。東京美術学校の開校に合わせて1889(明治22)年4月1日付で登録された貴重書9件で、その中にはウィリアム・ターナーの『イングランドとウェールズのピクチャレスクな眺め』(1838)が含まれている。これら寄贈書は、美校開校前、つまり鑑画会時代にビゲローが所持していた可能性が高い。

一方、東洋の引用源としては、『東洋美術史綱』から典拠を求めたい。フェノロサが東洋の山水画で最も評価したのが宋代、特に夏珪の山水画だった。他方で、しばしばターナーを夏珪に比定させて評している。芳崖がフェノロサの指導下で手掛けた最初の作品の1点は、1884(明治17)年の第2回内国絵画共進会に出品された「雪山暮溪図」であることがフリーア宛書簡に言及されているが、本作には芳崖による夏珪模本山水図と、ターナーの風景版画との折衷した要素を見出すことができる。来日前にフェノロサがハーバード大学で師事した美術史教授チャールズ・エリオット・ノートンは、ターナーを支持したジョン・ラスキンの朋友であり、1874年にはボストンでターナーの展覧会開催に尽力している。

本発表では、フェノロサが講演「美術真説」で唱えた「線・濃淡・色彩」に言及しつつ、フェノロサの絵画理論を、芳崖と雅邦による山水画を中心に紐解きたい。